

# 太后御記の原形

——はたして漢文体か——

石 原 昭 平

平安時代の女流日記、あるいは仮名散文の発生をどこに見出すか、という問題は現在まで決して明らかにされているわけではない。しかし、従来は「河海抄」所引の「太后御記」の仮名文をその原形とし、女流仮名散文の草創期の姿をそこに見て来たのである。だが、近年になり、川口久雄博士によって原形は伏見宮家に伝わる「御産部類記」にみえる漢文体のものであり、仮名ものは後に書き改めたものではないかという問題が提起されている。もとより、この問題は万葉仮名から一字一音の表音文字・草仮名・女手に至るまでの書道史的文字論と、それに伴う国語学史的な文法論とが密着して説かれねばならず、さらに散文発達の媒介素材としての和歌、およびその詞書、歌合日記も考え合わせねばならないであろう。

普通、現存のものからは、天平宝子六年「正倉院文書」の宣命、消息文から、下つては貞観九年の草書体による「有年申文」となり、女手初期のものとしては東山御文庫の宇多天皇宸筆「周易抄」(寛平九)の仮名の部分が寛平から延喜の初期のものと見られている。<sup>(2)</sup>延喜時代のものには周知のごとく「古今集」序文に

「なにはづのうた」「あさか山のことば」は「うたのちまは」のように、「てならふ人のはじめ」であると述べられ、現に先年、法隆寺(六〇七・再建七〇八)五重塔解体修理に「奈爾波都爾佐久夜己」の落書きが発見されていることは、万葉時代以後に、この歌が広範に歌われ、手習いに用いられながら平安時代に至ったことを示している。そして、その作歌圈が次第に女性に浸透し、日常生活に結びつき、恋愛贈答の媒介手段となつて来たことも、同序文で、近頃の歌が「あだなるうた、はかなきことのみ」詠み、「いろ好みのいへに、むもれぎの人しれぬこと」となつたという詞から読み取れる。このことは、序文の時期までに、多少公的な性格を帯びて来るけれど、歌合せが御息所、后宮、皇太夫人等の女性の名の下でも催されている(中将御息所歌合、前右宮胤子歌、皇太夫人班子女王歌合等)ことから理解される。さらに和歌に附随した歌合日記も仁和から寛平頃の「内裏菊合」(平安朝歌、合大成二)に初期の姿をみ、延喜十三年には伊勢が書いたという(和歌合、抄目録)「亭子院歌合」日記、さらに同二十一年の「京極御息所歌合」の日記等も現れる。しかしながら、承平五年の「土佐日記」以前に和歌と独立した事象を仮名散文で記したも

のは醍醐天皇の皇后穩子の「太后御記」(「河海抄」所収は「延長七(承平四年)」)と考えられていた。勿論、「土佐日記」自体が女性に擬装したとはいへ、

男性のものであり、「伊勢集」の詞書、「賀茂保憲女集」の序文というような私家集に従属した和歌関係のものを除くならば、最初の女流文学の達成は「蜻蛉日記」であろう。そして、その後の「紫式部日記」「讀岐侍典日記」「建寿御前日記」「中務内侍日記」「弁内侍日記」等の宮廷女性日記の系譜を考えると、「太后御記」が宮廷日記文学というジャンル形成の先駆的意味を持つことになる。と考えられる。しかるに「太后御記」の原形が漢文体であったとすると、日記文学史の発生もまた自ら異なるものとなるであろう。

川口博士によって提出された原形漢文体説の意味もそこにかかわる。以後、阿部秋生博士も暗にそれを踏襲され、「河海抄」によれば仮名であるが、「伏見家御記録」によれば変体漢文であったとみなければならぬ<sup>(4)</sup>。とされ、築島裕博士も、その著の「平安時代の言語体系」の項で、日記、記録類に変体漢文を用いた例は、殆んど男性ばかりで女性のものには知られていないが、「太后御記」が「伏見家記録」のような漢文で記されたとするならば唯一の例外となる、との由を述べられている。(もともと川口説は漢文体のものは中宮職の史生執筆説のようである)問題は「伏見家記録」の漢文体が、「太后御記」の原形かどうかにある。小稿は昨年新たに整理紹介された書陵部の伏見宮家旧蔵の新資料「皇太后(藤原)穩子御賀記」(「料」未収)、(「西宮記」(前田家・九条家・)、「三三三」(内閣文庫本のみ))、「扶桑略記」の記述形式、「伏見家記録」の

「御産記部類」の記載形態等からその問題を考察する。

一

まず「太后御記」を「河海抄」所引のものから掲げるのであるが、その本文についてみる。活字本「国文註釈全書」は諸言によると、書陵部本を底本として諸本を校合したとあるが、同所には桂宮本で、所謂中書本系十八冊本と、覆勘本系十冊本の二系統がある。全書本の本文は「太后御記」を最初に引用する初音の巻の「延喜七年正月十四日おとこたるかありて……」等からみると、覆勘本系のものによつたらしい。この箇所は中書本系(内閣文庫二本も同系)には「延長七年……」となつており、その史実記事(男踏歌)を同時代の記録に徴するに、延長七年のそれに見出せるが、「西宮記」「台記」延喜七年には見えない。又、長と喜の字は写本では似ている。この覆勘本系十冊本の祖本は善本らしいが、以後の書写校合による錯乱がある、とその奥書からいわれている。以上、中書本系を藍本とする桂宮十八冊本を底本にあげるゆえんである。(「ト・二〇」は書陵部桂宮一〇冊本、「ナ・一七」は「ナ・二二」は内閣・文庫本(「二〇三」一七本と「二〇三」二二本である)「ト・一〇」)

(一)太后御記云延長七年正月十四日おとこたうかありてわたかつけの藏人四人だうへわたりおはします云(初音)「以下ナシ」

(二)太后御記云承平三年八月廿七日女官御もたてまつるいぬ二に(「ナ・一七」)て御ものこしおとまゆひたてまつり給ひぬ(若菜上)

(三)太后御記云承平四年十二月九日御賀みこかんたちめには女の

(諸本ナシ)

よそひ宰相にはさくら色のほそなるが着たるきおひ(若菜上)

日(ト・〇)

四年延長七年三月廿八日太后御記云おとこの御賀を実頼の中將つ

かうまれり四尺の御屏風二よろひ御てをうへにかゝせたてま

つらせ給(若菜上)

日(ト・〇) (以上・諸本分注)

四年太后御記承平四年十二月九日御賀おとこまで給ぬ又をく

〇(ト・〇)

手万葉集(ト・〇)

り物沈のはこ一よろひいれたりせんたいの御てのまんよう今

一には本五まきやまとこと一云々(若菜上)

四年大宮日記云延長六年亭子院よりたかうなてまつれ給へり御

使よしふかいねりの大うちき給(横笛)

四年(四)の「おとこ」とは穩子の兄、忠平で、四年の時は左大臣、

(四)は摂政左大臣であつた「公卿」穩子は昭宣公基経の四女で「扶桑

補任」

略記

「大鏡」延喜元年三月女御「日本紀略」延長元年四月中宮「日本紀略」皇后

「扶桑略記」承平元年十一月皇太后「日本紀略」村上朝に入り天慶九年四

月皇太后と尊号され「大鏡」天慶八年正月崩じた。年七十で

ある「扶桑略記」又、「大宮日記」の大宮は皇太后宮のことであ

ろう。「公卿補任」康和五年、大納言源俊明を民部卿太

皇太后宮大夫、同六年、民部卿大宮大夫と呼ぶ。

からみると、少くとも「太后御記」は中宮から皇太后の時に書か

れ、(四)の承平四年は「土佐日記」成立の前年に当る。

次に川口説のいう漢文体のものをあげる。それは「伏見家御記

録」(というよりは「御産記部類」伏見家本、全く同内容のもの

が鷹司本、旧蔵紅葉山文庫内閣本にある)と「西宮記」巻十一、

皇后養産事 前田家卷子本、同一本、条家卷子本、旧にある。ここでは「御

蔵紅葉山文庫、内閣文庫本(篇外一冊)

産記部類」(伏見宮本を伝写した書陵部鷹司本・内閣文庫本)をあ

げる。

目次(巻一)

醍醐天皇 本朝世紀 朱雀院 延喜御記 貞信公記 年中行

事類聚 青縹紙 村上天皇 季部王記 不知記 外記等

醍醐天皇贈皇太后藤原麗子内

本朝世紀

仁和元年正月一日丁巳降誕

寛平元年十二月廿八日 酉為親王 同五年四月二日庚午為皇

太子天皇御南殿百寮待門其儀…… 朱雀院 醍醐天皇第十一皇子御

政大臣基経 公第四女

延喜御記 御誕生

延長元年七月廿四日丙寅辰刻中宮亮藤原元方候陣外令藏人頭

伊望朝臣奏皇后産事男也、即令伊望朝臣問平否又召元方細問

事申刻令右中将英明朝臣……八月一日壬申此日依中宮誕生七

日、仰内膳令供…… (以下九月六・十七・八・廿一・三日

略)

年中行事類聚第八十一 七夜

延長元年八月一日壬申当中宮御産後七日仍仰内藏寮穀倉院有

御禊事又遣侍臣……

青縹紙 産養儀

先(前田家古鈔本)

(一)延長元年七月廿四日皇后産男兒 前朱雀院内一匠寮作御温具七日間明經

女壬世子篇古文書經論語易一卷 御産七夜事 伝博士等相交説書千字文漢書日京帝紀

尚書史記毛詩明帝記左伝等也

七夜自大内有御養産事其物小台盤六前居

銀筥大坑四種馬頭盤七二變……參入王卿式部卿親王右大將右衛門督兼輔朝臣邦基朝臣四位五位六位殿上人被物大納言女裝一重……給女襲一具兒衣襟等也自余不記  
村上天皇醍醐天皇第十四皇子御諱成明  
母後醍醐天皇

延喜御記 御誕生 七夜

延長四年六月二日辰一剋伊望朝臣來申中宮產事男也即令伊望朝臣問安否還報只今經事七……日主人事仰……八日此日中宮七日也仰內膳司令供御饌但台盤元年

李部壬記 御誕生 產養

延長四年六月二日辰時中宮產給桂芳坊先是四月兒男也 中宮 桂芳坊御六日東宮產養是日參內裏即蒙詔參中宮共詔參先是勅台彈正親王……八日夜內裏御產養但台盤元年云聞……

青縹紙 產養

(二)同四年六月一日夜及曉皇后產男兒村上天皇 皇后御產事內侍奉仕御湯大君

前湯邦基朝臣妻御乳附即給女裝四日午日剃御髮五日自東宮有

(送前抄本)

養產事其物目棚厨子二脚居威儀御物也……參入人々彈正親王

三親王四親王左大臣邪基靖平時望伊衡等也……七夜自大內有

養產事其物榎木台盤三變……細長一重加袴一具……自余人々

賜大內大褂衿等從從在 貞信公產養事十三日自左大臣被奉物威儀御厨子一雙

居御物御衣四合有御衣机御衣二宮御襪襟二脚靴物甘具基手卅

貫女官御等相具也白余事如例

(一)已上日記出於先太后御記也  
(一)青縹紙の線部分(前) 田家古鈔本・西宮記にはない

不知記

皇太后產事  
延長四年六月二日丁亥天皇后於桂芳坊有御產事、六日辛卯皇

后御產五夜也仍春宮坊儲養三品克明親王四品代明親王……八

日癸巳公卿次是日皇后御產七日也。

外記

延長四年四月十五日皇后明日自飛香舍還御桂芳坊之由皇太后御懷孕自飛香舍還御桂芳坊之由說司

御產五日也……(一卷以下十八卷略)

みられるごとく、どの記録も中宮誕生直後の宮廷の動向を記したもので、「河海抄」の仮名が總子の身辺中心に對して、公的に起きた事象のみ客觀的に記述している。この中の(一)が川口説の真

名本「太后御記」である。しかしこれが「西宮記」前田家舊本、同冊、旧藏紅葉山文庫内閣文庫は篇目外一十一、皇后養產事、を見ると平安末の古鈔本には

傍線部分なく、建武元年補写のものでも、次のごとく微妙な異同がある。

(一)延長元年七月廿日、皇后產男兒(先)、内匠作御湯具七日間明

經博士等相交読書千字文漢書景帝 記文王世子篇……七夜自大內有御養產……

自余不記。

(二)延長四年六月一日夜及曉皇后產男兒村上天皇 皇后御產事內侍奉仕御湯大君前

湯……自余人々賜大內大褂衿等從從在

(三)十三日自左大臣被奉物威儀御厨子……女官御等相具也自余

事等如例(衣カ)已上日記出於先太后御記也

ここで川口説を要約すると、

(1) 右に掲げた「青縹紙」(一)(二)を「太后御記」の真名本とし、「河海抄」所収のそれを仮名本と呼ぶ。

(2) 従来、仮名本から真名本へと考えられたが、産養説書の儀の書名などから、もと(原形)は漢字と考える。

(3) このもとの日記の執筆者は中宮職の史生であらう。

(4) 後に仮名本は女藏人や博士の命婦に類する女房が真名本を書き改めた。「河海抄」のそれを真名体に書き改めると「青縹紙」と同じ性質になる。

(5) 前田家小右記「太后御記云給殿上人祿者」のそれは、これまでの真名本とは別のものらしい。

以上の中、鍵となる問題は「青縹紙」の記録を「太后御記」真名本とし、原形と考えるにある。(2)(3)(4)のいずれもその仮定に立った時の理由、執筆者、改筆者等の推論である。(5)については本文前後の同様の例から口頭であることを述べる。そして、その最大の理由は終末の「已上日記出於先太后御記也」という註記にあることは明らかである。そこでまず、この註記の行われた時期と青縹紙、西宮記との本文関係を考察する。

## 二

はじめに「青縹紙」にある「已上日記出於先太后御記也」が前田家本建武補写等の「西宮記」で「已上日記出於先太后御記也」と分註になっていることに注目したい。このことは、同じく「青縹紙」(一)の「延長元年……皇后産男兒（前朱雀院内匠寮作御湯具七日間明延紀）……」が「西宮

記」には「延長元年……皇后産男兒（先朱雀院内匠寮作御湯具……相交）……」とあることに注目して、この分註時期の解明にある示唆を与える。

即ち「前朱雀院」等々註記から村上天皇即位以後（川口説）、あるいは青縹紙の方を文字通り元からあったとは解し諱を證と解すると冷泉天皇康保四年以後となる。さらに「西宮記」の「先太后……」の「先」という同時性を考えると、これも註記時点の一致の意味を持つて来る。

そこで、穩子が「先」の太后と呼ばれた時点を考える。まず太后と呼ばれるのは辞書、事典では皇太后、太皇太后と称するとあるが、実例によると、一条天皇の初期後宮は大皇太后が昌子で「一代要記」には「太后昌子内親王」とし、次に「皇太后詮子」「皇太后遵子」とあるごとく、「太后」を指しらしい。「令集解」に「太皇太后（謂天明祖母尊后位）」と述べられ「中右記」（天治元年）に「国史以後二代母后、延喜太后、藤穩子（朱雀院村上、天曆皇后藤安子、冷泉院后寛弘中宮藤彰子、後一条院後朱雀院母后）」とある。その当時の称号をみると「西宮記」（卷六、一十二月、荷前使の項に）「宇治三所」（在、木幡山中）「江家次第」（卷第三、周忌）

荷前事 卷十

宇治太后、朱雀村上母后、太后、穩子、

中宇治中后、冷泉院融母后、中后、安子、



四年六月一日皇后産男兒村上天皇内侍奉仕御湯大君前湯」に示される。兼良がこの記録を見ていたことは、これにつづく本文「旨の夜……」の考証記事内容でも明らかであるが、それにしても出典を記されないのはいかなる原因に基くのであろうか。兼良は撰家に生れ廟堂の執柄の地位もさることながら、「深語和秘抄」「深語年立」から「公事根源」「日本紀纂疏」の著、「江次第抄」「職原抄」の編等「弁疑書目録」が示す通りの古典故実家であつた。「河海抄」の考証を「分明ならず」「誤まれり」とも批判する新資料を駆使し、「令義解云」「西宮抄云」「御記云」等大部分は原文引用の出典明記されるが、御賀・聖忌等の出典不明の漢文体のあることは、書名を落したか、記録はあるが、書名のないものであつた場合などがある。書名のない記録で後に内容から附けられるものは、伏見宮家旧蔵目錄の中にも見える。しかし、ここでは兼良としては出典を記すことが出来なかつた場合と見られる。それは「西宮記云」のごとく書くべきであつても、明らかに後人加筆の部分卷十八「入道殿(道長)仰云」卷六「関白相府(頼通)命云」「右府(実資)命云」以下のごとき天武五年高明の葬後のものとわたり、たとえ書名があつたとしても「―出也」だけの曖昧の註記であつたなら、書名孫引きなどは「河海抄」の史料を批判的にみている著述態度からみて考えられない。その例証をみる。「花鳥余情」

若菜上「中宮まかこさせ給て」としの残りの御いのり」の註

(1) 承平四年三月中宮御賀七、大寺、東西、延暦、極楽寺、各五百端、西大法隆、東西、極楽寺、各四百端奉為中宮息災延命也。

「西宮記」卷十二賀事一、のこの部分は

(2) 承平四年三月廿四日中宮御賀試奉天皇……貞信、公御記、廿九日

奉仕中宮……三月十五日右大弁来云……十六日七、大寺、東西、延暦、極楽寺等、各五百端……(以下(1)と同じ)

この例でわかる通り、「花鳥余情」の出典不記は、右のように「西宮記」には所載されるが、「貞信公記」の孫引のごとき引用であつていづれとも記せない場合に多い。又、右の例から「延長四年六月一日皇后産男子……」もこのような例であり、兼良が「西宮記」系本文から取つたこともわかる。このことは「貞信公記」の様な当時の記録を「西宮記」が「皇后御賀事」として部類的に集録したのであり、同様に、川口説にいう当時の、皇后の産養が載る記録を「西宮記」が「皇后産養事」として集録したものといえよう。さらに降つて伏宮家の「御産記部類」の編者が年次に順つて二分したものと考えられる。

ここで、同様の当時の皇后の産養記録は少ないので見当らないが、御賀の記があるので新資料として一端を記す。伏見宮家旧蔵「皇太后藤原御賀記六十賀」鎌倉写一巻というものであるが、丁度、右と同じく承平四年三月十六日の条がある。

申刈公家奉□皇后五十賀於十一箇寺、修誦誦延暦寺、東大寺、興福寺、大安寺、元興寺、西大寺、各調布五百端、藥師寺、法隆寺、東寺、西寺、極楽寺、各四百端、近京之寺、以殿上侍臣□□使南京諸寺□侍從……。

内容は前掲の「貞信公記」「西宮記」の如きと大同小異の公家官人記録である。年代は「河海抄」の(2)と同年のものであるが、本質的には「皇后産養事」の記録態度と変わらず、公的な客観的方法で起つた事柄のみを記し、仮名「太后御記」のように私的

な視点からの表現は見られない。「御賀記」はその外、三月廿二日、廿四日、廿六日、廿七日、廿八日、天慶七年十二月廿八日を所収する。廿六、七日は「西宮記」と作法、列席公卿等の内容が類似して「天子賀皇太后五十賀……」「主上為皇太后六十賀於……」のように太政官方面からの筆録も思わせ、殿上日記や蔵人日記の類かとも見える。

また又「母后代々御賀記」室町写一卷なるものも同宮家旧蔵にあり、内容は清和天皇母后明子日貞觀十年十二月五、六、九、陽成院母后高子元慶六年三月、廿七、八日、宇多天皇母后班子寛平四年三月、十三、四日、村上天皇母后穩子承平四年三月廿四、廿七、八日、一条院母后詮子長保三年十月、三、七、九、十日、附執柄北政所賀治三年十月十三日、長元六年十一月廿九日、元康三年十一月廿六日であり班子のみの「大日本史料」にあり、穩子のものは承平四年三月廿四、七、八日ともに先掲の「御賀記」の順序で、描写の対象異なるが、内容は変わらず、廿七日は「西宮記」と類似する。これらの意味する所は、この二つの御賀の記録が「西宮記」「貞信公記」の如きものに变らず、したがって「西宮記」と同文の「青縹紙」に比して本質的差異はなく、このような記録が幾種類も仮名「太后御記」と、年代、内容を同じくして存在したということである。そこに「已上日記出於先太后御記世」と、後代の記録編者が註記する可能性は充分にある。

#### 四

「御産記部類」の中でほとんど十六卷に至るまでその出典の記録がわかって「延喜御記」・「貞信公記」のごとくその題名を冒頭

に記すが、問題の記録のみ「青縹紙」という紙名を普通名詞化して題名とし、しかも、このみ末尾に註記するという異例は、出典名が不明であったので、後に「太后御記」と同年次、同内容で一致すると徴されて、註記がなされたその時期は前掲後宋、備載長元九年以降と考えられる。出典不明のものは先掲二種の御賀記の如きもので、後に内容から題を付けている。しからば「青縹紙」の記録はどこから来たかというに、やはり「西宮記」から取ったとしか言えないと考える。もとは註記のない記録で初期にはそのまま「西宮記」に所収されていたのであろう（前田家古鈔本のごとく）。現存「西宮記」は高明が天元五年薨じた後、先掲のごとく道長頼道・実資等のものの後人追記、紙背記載後の転写の本文混入等が多く、十年後の「小右記」正暦四年正月廿五日は道長高明の女明子が実資に貸付し取り返した由を記し、「権記」寛弘六年三月一日では行成も貸り、公任も実資にこの書のことをきいたり、「北山抄」にも引用が多いのである。このことは一条朝以後の朝儀典例の最も重要なものとして引用研究されたことを示し、「富家語談」に「作法・西宮・並四条大納言書」、古今著聞集に「付恒例臨時の大小寺西宮記・北山抄を以て其龜鏡」とされ、出典の不明記録の註記され得る時代背景を知る。一条兼良は「桃華藥葉」類從本、朝本書事「当家相伝十二合文書」「当家相伝正記」集を記し、「北山抄」「江次第」とともに「西宮抄」西宮左明徳之恒例臨時公事儀式也をあげた。この中の臨時十一に、皇后産養もあるはず。さらにその項に「西宮抄者古礼也、北山抄者……」とその伝世記録目録によるとる龐大な量と博学から「誤事等有り」とする。「花鳥余情」執筆の時「西宮記」「皇后産養事」は末尾に「已上日記……」



の分註はあつたらうか。「青纒紙」編纂 正嘉永弘長元年 から約二百年後である。同書唯一の「太后御記」引用の条をみるに「河海抄」が

「梁書」「御記」を引く時兼良は独自の「李邵王記」「貞信公記」を引用し、「太后御記」は手許になつたのか、「河海抄」引用の内容のみ記し、「その子細は太后の御日記にもみえたり」とする。

そしてすぐ後の七夜産養の本文例証に「青纒紙」(二)の「延長四年……皇后産男児……」を引いているので、これが「太后御記」

本文であるならば「太后御記云——」としたはずである。疑いがあつてか、分註がないか、である。「西宮記云」としない理由は先述した。又、分註が末尾にあり、それが確実に信じられる漢文体であつたならば、当時、後花園天皇が「新統古今集」の序文執筆を命じ、応へて真仮名両序を作り、「本朝書籍目録」を求められてもいるのでその「仮名」部に「太后御記」があることも知悉してははずである上に、「河海抄」に拮抗、批判し、考証にも独自の資料をもつてする態度は「河海あやまりなり」 巻十八の初子 とくく註記すると思われる。やはり註記はなかつたと考えられる。

「河海抄」の引用も真名、仮名の引用が曖昧の様子は無い。

「伊勢」「大和」「栄花」「うづぼ」の各物語「蜻蛉日記」「紫式部仮名記」「貞文日記」「伊勢集、和歌類」等は仮名引用であり、「延喜御記」「寛平御遺誡」「三代実録」「北山抄」等は漢文であり、現存のもの何一つ反対の文体引用はなく、むしろ次の様な例がある。「こたみ今度 ユ 日本紀点字津穂蜻蛉の日にも如此書之仮名書様也」(巻二)「雄丹 伊勢物語 真名本」(同)「異 万葉伊勢物語 語真名本」(同)「けさうん、気装人、仮想人 新撰梁記、伊勢物語 真名本」(同)のごとく、文字引用まで正確で

あるので、「太后御記」の場合のみ漢文体を仮名にしたと思えず、両者共存ならば六カ所中一・二箇所ぐらゐは漢文体であるはずである。善成は少くとも漢文体のものは見ていない。

## 五

次に川口博士の掲げられた前田家本「小右記」に、「太后御記」の本文のごときものがあるように解されるが、その部分を詳しくみると、寛仁三年正月三日の条に、

頭并経通書状云、今日可有拝観之礼、可示其間事等者、亦至于重事申前太府、可從彼命、小時来云、見清涼記、可有御贈物、愿從人禄者、余答云、御贈物、禄等事者……前太府、撰政被問拜観間事、禄有無等、余申云、件事慚不知給、但邑上天曆七年御記云、三日参弘循殿、奉拜太后、其外無事、亦見清涼記、御座宮内之時、似可無禄……前太府云、承平二年太后御記云、給殿上人禄者、余今就此御記案之、童帝初积観、仍有禄事歟、去年御之服日、有积観

これは、前左太府道長が母后に御贈物及び禄あるかどうかを実資にきき、彼が旧記よりないと答えると、道長が「太后御記」で給しているといつて、いるとし、実資がこれについて考えるという経過で、この場合の「太后御記云」は原文引用でなく、内容の口頭口述である。

その外、「小右記」 長和三年十月廿一日、十一月十五日 に東宮御対面の時の母后の例をまだ見てないが、「若見天曆母后御記一歟」とあり、二十五日後に「被示御対面天曆太后御日記事」等あるが「太后御記」

原形かどうか「見敷」「事」等から判然としない。むしろ、内容のみ問題にしたこの場合には、その事の究明は困難であるが、仮名大后御記と別の漢文体のものが、中宮職のしかるべき官吏、あるいは中務省で書かれなかったとは断言出来ない。後代の規範となる三代御記の書かれた時代背景を考えて想像出来ないことはない。しかし、例えば「権記」寛弘五年九月十七日と「紫式部日記」の同じく彰子第二皇子降誕七夜の儀という両文体記録があったとしても、今、問題とする個性の営みを持った女流散文源流探究に對し、客観的非個性的漢文体を原形として論ずる対象とはしていない。

## 六

次に「已上日記先太后御記也」という註記が原形本文の直接引用かという問題である。まず解釈からみる。「已上日記先太后御記出也」と読む時、「已上」の記録は「先太后御記」に出ていると解し、「先」のかかるのは「御記」でなく「大后」と考えられる。〔記録異同考〕から、穩子を「先太后」と称した後朱雀天皇以降のある時期に皇后が日記を書いていなくとも差し障りはない。問題は「A日記出於B日記」が「A出於B也」「A||B」と解釈されてよいかどうかである。この場合、Aの（日記）の本文はBの（日記の原形）であると考ええるには問題があると思われる。

ここに直接本文引用は「A日記云——已上」であり、だいたいの本文内容を示す間接の出典明記は「——出A日記」ではないかと仮定する時、一つの例として「三宝給詞」等を素材として掲載し、出典を明記した「扶桑略記」の場合を考える。

周知のごとく「扶桑略記」は仏教を中心として、帝王系図を基とし、国史・日記・実録・伝記・縁起その他多くの記録を蒐集・編纂したという点でわが国初の通史であり、出典記事の引用註記もこれを先驅とする。

(1) 「扶桑略記」桓武天皇誕曆廿四日九月一日の条

「国史云、聖德法師以三勤操等七人、灌頂受法弟子已上」（国史大系本 以下断らない場）

は「続日本紀」天長十年十月二十日の条

「秋八月宣勅令聖德法師修入唐所受灌頂秘法、是大法師修三勤操等七人為受法弟子。」

(2) 「扶桑略記」朱雀天皇天慶三年正月十一日

「官符云、大政官符、東海東山道諸国司。応<sub>再</sub>拔下有<sub>三</sub>殊功<sub>二</sub>輩<sub>上</sub>、加<sub>三</sub>不次賞<sub>中</sub>事。右平将門積惡弥長宿暴暗成、猥招<sub>二</sub>鳥合之群

……諸国承知依<sub>レ</sub>宣行<sub>レ</sub>之、普告<sub>二</sub>遐邇<sub>一</sub>知<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>。符到奉行……五位下兼行内藏頭源朝臣相藏。已上」

「本朝文粹」卷二 太政官符東海東山道諸国司

応<sub>再</sub>拔下有<sub>三</sub>殊功<sub>二</sub>輩<sub>上</sub>、加<sub>三</sub>不次賞<sub>中</sub>事

右平将門、積惡弥長、宿暴暗成猥招<sub>二</sub>鳥合之羣<sub>一</sub>……諸国承知依宣行之、普告<sub>二</sub>遐邇<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>此由<sub>一</sub>、符到奉行……。五位下兼行内藏頭源朝臣相藏

以上、本文直接引用の「——云——已上」という引用形式である。(1)のごとく前後の要点と主語の取捨は多少あるが、少くとも

「已上」の直前は原文あるいは原文体である。このような例は「続日本紀」から取ったと思われる文武天皇三年、四年、神護四

年、宝龜三年の条に「已上国史」とあり、平安時代に至り、「三代実録」の引用は清和、陽成、光孝三天皇の記事に多く、元慶元年、同五年十月以下仁和三年三月十四日までにくとも十箇所に「已上国史」とあり、同文の取捨あるいは同文体である。その外「略記」唐平五年十二月二十八日の条に「陸奥話記」を「奥州合戦記云……已上」として原文の原語を大部分使用しつつ（群書類従本による）所々取捨している。また、「天台南山無動寺建立和尚伝」（類従本）を「略記」が「相応和尚伝云……已上」延喜十八年、「相応伝云……已上」延喜十八年、「已上本伝」延喜十一年条等とあつて殆んど原文に忠実である。さらに天徳四年九月の条に「御日記云……已上」とあるが、現存の「宸記集」も逸文集なのでわからない。しかし、「略記」寛平元年正月十八日の「已上御記」の引用文は「西宮記」十七臨時五と同文で信憑性の高いものであろう。天徳四年五月十日の条も「西宮記」と一致する。（一）の方は無削除の原文引用で「略記」延喜五年七月廿一日「法皇……」が「文粹」巻七にあり、このような例は他に十二箇所指摘されている。また「略記」大化二年の条「件橋北岸石銘白……已上」は「帝王編年記」に全文がある。

次に間接の内容引用ではないかと考えられる「——出——記」「已上」出於「記世」の形式についてみる。「略記」椎古天皇二十九年、太子新去の条「已上太子新年二説共出已上伝文」とあるが「聖徳太子伝暦」（類従本）には春二月の条に一説はのるも、一説の人名、語句の断片はるか後日にみえるのみである。伝本の乱れとは考えられない。「略記」斉明天皇七年七月廿四日の条

大和国添上郡山村中里有直塚家長公至誠為亡母修少善差使請師命白以先值僧將為講師路遇一僧致敬延請僧歌心受其請到檀主宅……我是先生此家長之母也。我先世不知其子私用稻十束今吾因此罪受牛身而償先債若欲知其虚実……我母可就此度即時中漸步来臥其座上……為牛修善即日牛斃已上出景戒記私云雖出靈異記文新条頗區信用天畜生之言語劫初時聞人

……若以夢内妄想誤錄  
覽前之實語矣覽者取捨  
これに当る「日本靈異記」は上巻第廿三「凶人不敬養孀房母以現得惡死之縁」で

大和国添上郡有二凶人也、其名末詳、字曰瞻保、是難破宮……預學生云人也、徒學生之人也、不養其母々貸子稻天三物司償、瞻保忍怒逼徵之時母居地、子坐胡座……而反見迫辱願心違謹矣汝已徵負稻五亦徵乳直……瞻保於是不言而起入於屋裏、拾出拳卷於其庭中皆已焼滅然後入山……瞻保无憑餓塞而死。

これは大和という所と不孝譚という内容のみが一致するだけで「略記」はその不孝者が牛になり死ぬが、「靈異記」は餓死する。そして「略記」分註にあるごとく文に信用出来ないで覽者取捨したとある。このことは考徳天皇白雉四年に「以上出慶氏往生記但年代不槩」という註記から不確定の引用に用いたらしい。ただし、敏達天皇十四年後半は「靈異記」上巻三話と「已上出靈異記」を註しながら同文である。

「紀略」天延二年二月二十八日の条

八九月間有<sup>二</sup>疱瘡疫<sup>一</sup>天子貴賤死亡者多矣秋日伊尹朝臣之四男  
右近少將藤原義孝<sup>二</sup>疱瘡而卒矣<sup>一</sup>、深帰<sup>二</sup>弘法常誦<sup>一</sup>法華<sup>二</sup>命終之  
間誦<sup>二</sup>方便品<sup>一</sup>氣絶之後……<sup>已上出  
藤氏記</sup>

「日本往生極樂記」(類從本)には

右近衛少將藤原義孝、大政大臣贈正一位謙德公第四子也深  
帰<sup>二</sup>弘法<sup>一</sup>終斷<sup>二</sup>華歷<sup>一</sup>勳王之間誦<sup>二</sup>法華經<sup>一</sup>天延二年秋病<sup>二</sup>疱瘡<sup>一</sup>  
而卒矣……。

やはり前年は本文でなく内容を取ったであろう。だが、「略記」  
天武天皇十三年に「已上在大安寺記」天智天皇七年の条に「已  
上出彼寺記」とあり、天平六年の条に「已上出彼寺縁起」と  
あって、「興福寺縁起」を指す等多くその本文関係は必ずしも公  
式どおりではない。勿論、本文そのままの部分も多いことは事実  
であるが、本来仏教的正史編纂の意図が主流であつてみれば、仏  
教関係記事の正確は出来る限り期したに違いない。だから世俗的  
記事の場合が多くは内容から取つて「出」としたと考えられる。  
そうすると、もとより仏教書の引用から公式的仮定を導いても、  
その蓋然性は少ないといえようが、「出」は「云」より内容的な  
引用である可能性は認められるのではないかと考えられる。また  
その際本文の伝本、漢文体における異同の差も配慮しなければな  
らないであらう。

## 七

次に「太后御記」の書かれた醍醐村上朝は天皇も記録を書か  
れ、後代の朝儀典例の規範になったことを考えると、仮名文「太

后御記」が、後に後宮関係の官庁の有故実のため、その内容が漢  
文体に書き改められないという証はないであろう。むしろ書き改  
められる可能性がある。先掲「伏見宮記録」にも所収されていた  
「不知記」には仮名のものとがあると報じられている。又「中宮御  
所女房日記」は桃園天皇皇女欣子の仮名日記である。そうした文  
体的変化の時代背景を考えて可能性を求めるならば、為憲が冷泉  
帝第二皇女尊子に奉つた「三宝絵詞」が「扶桑略記」に載ってい  
ることが想起される。

周知のごとく「三宝絵詞」には伝俊頼筆の草仮名文の東大寺  
切、片仮名漢字混りの観音院東寺本(文永書写)と変体漢文から  
なる前田家本(寛喜書写)正徳複製の三本あるが、正本の内親王  
に献呈したのは草仮名本であり、漢語の字音表記、仮名遣い、敬  
相、回想、推量の助動詞等から平安中期頃か正しい表記法がある  
と国語の方面から春日和男氏が結論され、山田孝雄博士は東寺本  
がこの草仮名文を男性向きに、「今昔」「打聞集」「古事談」のご  
とく改めたものとその用語から述べられ、前田家本は東大寺切の  
字面、訓読語の字音表記を漢字漢文体としたもので順の弟子で  
「口遊」中の手習詞「太為爾」の音韻資料を残し、漢学者であつ  
た為憲の筆と見ることは不可能であるとされる。漢文の草案説も  
あるが、正本は女性のための仮名であり、それが流布し、東寺本  
の片仮名交り訓読本、前田家漢文体のものようになったらしい。  
以上の国語学的研究成果の業績の上に「扶桑略記」を引用す  
るのであるが、「三宝絵詞」自身、日本霊異記と重なるところ多  
いので明らかに「三宝絵詞」の引用とわかる所を挙げる。孝徳天

皇白雉四年六月の条

……忽失<sup>三</sup>所在<sup>一</sup>矣。具如奈良京東御。寺僧景戒筆異記。又為<sup>憲</sup>記云、道昭和尙<sup>三</sup>渡唐之時受<sup>三</sup>五百虎之請<sup>二</sup>至<sup>三</sup>新羅山中<sup>一</sup>講<sup>三</sup>法華經<sup>一</sup>。時有<sup>下</sup>以<sup>三</sup>本朝之詞<sup>一</sup>、<sup>三</sup>拳疑之人<sup>一</sup>、道和上問云是誰人哉、答言。吾是日本行者、優婆塞也、我國神曲人語。因<sup>レ</sup>是厭去但時々<sup>レ</sup>往<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>已<sup>上</sup>為<sup>レ</sup>憲記也。

東寺本、中卷 役行者

我朝ノ道照法師、勅ヲ承テ法ヲモトメムカタメニ、モロコシにワタリシ時、新羅ニ五虎ノ請ヲ請ヲ受ケテ新羅にイタレリ、山内ニシテ法華經ヲ講ズル庭ニ人アリテ我國ノ詞ニテウタカヒヲアケタリ、道昭和尙タルソトヘハ答云、我ハモト日本國ニアリシ役優婆塞也、彼國ノ人神ノ心モ枉リ、人ノ心モアシカリシカバサリニシ也、今モ時々ハカヨヒユクトイフ。傍点以外は同文である。東大寺切はこの部分欠けているらしいが、その直前が翻刻紹介されているので挙げて置く。

○東寺本、一言主神人ニ付言云、役優婆塞バカリコトヲナシテ國ヲカタフケタテマツラムトスト愛ニ公家……

○東大寺切、きていはくうんのうはそこはかりことをなして、くにをかたふけむとすといふ。

傍点が一致する。東寺本と東大寺切の相違は時代・対象に必要な文体変化を想像するが、「扶桑略記」も、正史の文体である漢文体に書き改めがなされたのではないか。このことは「栄花物語」疑巻が山田博士の調査によると十六ヶ所、東寺本と一致し「袖中抄」巻六「くめちのはし」が、先掲の役優婆塞の記事と追記の「古人伝イワク江ノ行者……」を平仮名に改め移植している事実

からもこの本文が後世に引用されたことが背けるかと思う。従って、平仮名文の漢文体化による文体変化の可能性、即ち「太后御記」の後宮における有職故実の必要による漢文体化の可能性を見ることが出来ると思う。

## 八

以上、要約すると川口博士のいわれる「太后御記」の一部である漢文体の「御産部類記」は、末尾の註記「已上日記出於先太后御記也」から判断されたものであるが、その註記は後朱雀天皇以降であり、その編纂は正嘉弘長年間である。原形の記録と思われる前田家鎌倉以前古鈔本には「已上日記出於先太后御記也」の註記なく「西宮記」に所収されたが、この書は故実書として後人の加筆註記多いので一条朝以降に、それがなされたであろう。「花鳥余情」の著者はその本文<sup>延長四年六月一日</sup>を引用したが、他の出典書名の曖昧な物と同様に書名は記さない。このような当時名称のない皇后関係の記録は穩子のもの「皇后<sup>（藤原）</sup>御賀記」<sup>御賀記</sup>を始めとして種々あり、「河海抄」所収の「太后御記」と同年代、同内容のものもあって、「出於太后御記」のごとく引用註記したと思われる。それ故、川口博士のあげられる漢文体のものは私的個人的な女性の散文発生からみると、「太后御記」の原形でなく、「河海抄」の引用文が他書本文を正確にするところからみて、それが「太后御記」の原形と考えられる。しかし、時代背景を考えて官庁である中務省が中宮職で男子によって平行して漢文が書かれたかも知れない。又、仮名文必要に應じ、目的・対象に沿って漢文体に書き改

められる可能性と実例が「三宝絵詞」にあると考えられる。

小論は「太后御記」の書かれる背景と必要性に及ばないが、以前にそれに触れた拙稿<sup>20</sup>があるので省いた。ただその中で「令集解」<sup>後宮職員</sup>尚侍の職掌のところで「所仕記」上日行事」等があるのを見出し、女性の宮廷日記の源の姿を求めたが、その後の水尾天皇宸記仮名「うぶやしなひの日記」<sup>内閣</sup>とか、「女一宮女房日記」「中宮御所女房日記」「大宮御所女房日記」(桃園天皇女欣子内親王側近の女房、上臈局冷泉周子筆)「御湯殿の日記」等と続くものの中から宮廷日記文学のジャンル形成の過程について多くの示唆を与えられるのである。

注(1) 「最古の女流日記」古典文学大系20 <sup>「土佐、精給日記」</sup> 集月報

(2) 堀江知彦氏「書道の歴史」九章「かなの生いたち」飯島春敬氏「古典かな字鑑」解説「仮名の歴史」。

(3) 前掲。

(4) 昭和三十八年十月「国語と国文学」「日本紀と物語」。

(5) 「平安時代漢文訓読語につきての研究」

(6) 前掲書第一章、二節。

(7) 「註釈全書」二三九頁。

(8) 「書陵部典籍解題」文学篇「河海抄」解説。

(9) 「青縹紙」と同内容の前田家本「西宮記巻十一后養産」には和田英松氏という平安末古鈔本と建武補写本、別本(不完本)があり、又、大永鈔写本もある。古鈔本は建武の奥書と同筆の追記あるが最古で原形に近いと考えられる。

(10) それ以前の書き入れ、追記等の集大成である建武補写本をあげる。

(11) 上坂信男氏より御教示いたゞく。

(12) 同

(13) 「七日の夜よりも御うぶやくなひのことあり」の註に「延長元年七月廿日朱雀院御誕生の御うぶやしなひ内裏よりせらる……」と廿日により「西宮記」古鈔本系のものとわかる。

(14) 「書陵部紀要」第十五号所載「伏見宮旧蔵図書仮目録」に新たに紹介された。

(15) 同

(16) 永島福太郎著「一条兼良」一〇頁。

(17) (14)と同じ。

(18) 「立正大学文学部論叢」第五号、平田俊春氏「扶桑略記の研究」に本文をあげて説明されている。この稿から教えいたゞく。

(19) 同論文

(20) 前掲「伏見宮家旧蔵仮目録」記録「后宮御著帶部類記」後嵯峨天皇中宮嫡子の項同前、「不知記(仮名)」とある。

(21) 「三宝給詞東大寺切管見」国記国文三十三年十一月、続

「三宝給詞東大寺切管見」同三十六年一月、「草仮名による字音表記」「文学研究」一九五九年。

(22) 同博士「三宝給詞の研究」国語・国文昭二十四年十月。

(23) 「叢岳要記」に「為憲三宝給草案中在之」とあるが、本文不伝で、メモ草稿であろうといわれる。(前掲論文等)現在東大寺切系本文が後述のごとく「栄花物語」「袖中抄」にあるところから考えても、これは一般には流布しないと考えられている。

(24) 「三宝絵詞東大寺切断簡」国語・国文昭二十八年十二月。

(四四ページへつづく)